

高齢者施設介護職員のレクリエーション・イメージ — 標記職員教育のための試験的調査 —

○山崎律子、上野 幸、廣田治久（余暇問題研究所）

キーワード:レクリエーション・イメージ、高齢者介護施設職員、自由連想法、レクリエーション教育

1 はじめに

現在の介護保険制度においては、レクリエーション・サービスを介護保険サービスの対象外にしている。かつ介護福祉士養成機関においても、レクリエーション科目は必修科目としては除外されている。しかしながら施設における利用者の生活におけるレクリエーション・プログラムは、その認識に相違があっても、現実には重要・不可欠なものとなっている。それ故、介護福祉士養成学校の中には、レクリエーション関係科目を開講している。あるいはまた、介護職員自身らがレクリエーション・プログラム担当になっているのが現状である。

本実践研究報告者らは、研究所として 2005 年から、高齢者福祉施設におけるより良いレクリエーション支援によって、利用者の日々の生きがい感を保持・増進していただくために、“レクリエーション・セミナー”として介護職員を対象に、レクリエーション教育（現実的には、活動そのものの修得要求が多い。しかしこれらを満足させながら、主眼は、レクリエーションの基本的知識、活動支援法の基本、高齢者に接する基本的態度などの修得を目標にしている）を北は北海道（札幌・帯広）から南は沖縄（那覇）まで全国的に実施してきた。本年でちょうど 11 年目に当たり、対象者の再把握、とくに現時点で、職務としてレクリエーション支援を担当する介護職員（レクリエーションに関心のある者を含む）のレクリエーションに対するイメージ把握が、セミナーをより効果的に実施することが期待されるものと考えた。これが本実践研究報告を実施させた問題意識と動機である。

そもそもイメージ（IMAGE）とは、日本語で印象、心象などと言われ、意識に浮かんだ姿を意味する。普通は意識下にあり、無意識の状態ではある。しかし人の行動は、イメージに影響されて行動することが多いことから、イメージ研究は、元来深層心理学の分野（とくにユング派）、であるが、マーケティング分野でも活用されている。

本学会では、研究会設立期には、レクリエーションへの意識の探究が中心であり、アンケート調査が主流であったが、高橋（和）がレクリエーション・イメージを大学生に実施（1968 研究会時代）、以後グループゲームイメージ分析が試みられてきた。学会設立後も鈴木らが SD 法によるゲーム・イメージの比較考察（1972）などを手掛けてきた。

したがって、本実践研究報告の目的は、レクリエーション・セミナー参加介護職員が持つレクリエーションに対するイメージを把握することにより、今後のセミナーにおける現役職員教育への方向性（テーマの設定、教育内容の設定、教育レベルの設定など）示唆を得ることにある。

今回の具体的目標は、主に年代別の反応語傾向の把握にある。

2 方法

(1) 自由連想法調査、2015年5月8日～2015年6月13日（全7会場－高知、松山、前橋、松本、新潟、富山、金沢－）、各セミナー開始直前に3分間実施

(2) グループ KJ 法による分析、本実践報告者らによる以下の分析を実施

- ① 似た反応語 2 語以上を同じ島への書き入れ
- ② 反応語類別（大きな島から、小さな島の作成移動）
- ③ 反応語の分類（高橋の分類を基に職種を加味した 6 分類）
- ④ 反応語全般の観察

注・・・数値的に分析するには、SD 法やクラスター（cluster）分析があり、それに伴う科学的手法を用いることが通例である。しかし現場では費用的、時間的、人的にも難がある。かつ無機的にならざるを得ない。一方現場では、直接見聞きすることにより、人間の五感をフルに働かせることが期待される。かつ本実践研究報告は、目安を得るためのパイロット・スタディであるが故に、敢えて手作業によるグループ KJ 法を採用した。

3 結果

(1) 調査・分析対象者数

表 1 有効分析対象者数

	20代	30代	40代	50代	60代	計
男性	7	10	7	8	1	33 (17.3%)
女性	25	27	42	47	17	158 (82.7%)
計	32	37	49	55	18	191

* 全被調査者は 201 名であったが、10 歳代女性 2 名、年齢性別不明者 4 名、および調査意図と解答が異なる 40 代男女計 2 名、50 代女性 2 名を除外し、有効分析対象者数は合計 191 名であった。

(2) 分類による反応語傾向

表 2 分類による総反応語数

	男性	女性	合計
感情	47	242	289
種目	86	517	603
叙述	49	263	312
共存	46	243	289
印象	23	130	153
役割	61	252	313
合計	312	1647	1959

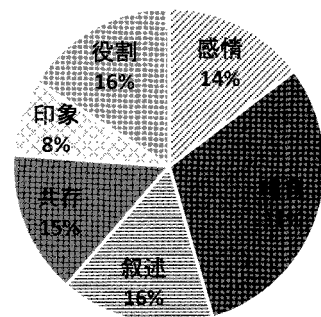


図 1 反応語分類の割合

表3 女性年代別分類による反応語数

	20代	30代	40代	50代	60代	合計
感情	34	41	74	73	20	242
種目	64	84	135	173	61	517
叙述	33	39	88	83	20	263
共存	35	35	64	83	26	243
印象	21	12	30	52	15	130
役割	40	39	69	84	20	252
合計	227	250	460	548	162	1647

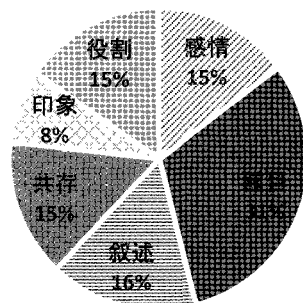


図2 女性反応語分類割合

表4 男性年代別分類による反応語数

	20代	30代	40代	50代	60代	合計
感情	10	14	7	13	3	47
種目	21	22	16	27	0	86
叙述	12	17	7	13	0	49
共存	9	21	6	10	0	46
印象	2	8	3	9	1	23
役割	10	20	13	14	4	61
合計	64	102	52	86	8	312

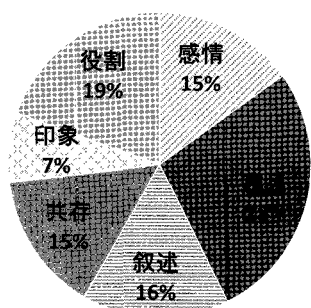


図3 男性反応語分類割合

(2) 反応語ベスト3

表5 反応語ベスト3

感情	1.楽しい	159	共存	1.コミュニケーション	54
	2.おもしろい	21		2.みんな	20
	3.難しい	18		2.仲間	20
	明るい	16		大人数	12
種目	1.体操	64	印象	1.リズム	13
	2.歌	62		2.声	11
	3.ゲーム	61		3.汗	10
	運動	50		にぎやか	6
叙述	1.笑顔	88	役割	1.からだ	15
	2.遊び	53		2.リハビリ	13
	3.笑い	36		3.頭	10
	元気	22			

4 考察

- (1) 反応語の分類における結果は、図示されている通りである。
- 1) 種目反応が全般的に多い。これは、施設において日常的に実施していることによって、経験的、体感的にも強くイメージ化されたものと推測される。歌、ゲーム、体操などである。
 - 2) 感情反応は、肯定的反応と否定的反応に分けられる。肯定的反応は大多数が、“楽しい”“面白い”“明るい”などの一般的な言葉で表されている。否定的反応は“難しい”“たいへん”“面倒な”など、明らかに被分析者の役割に関係する反応語であり、現場での実感が沸々として湧き上がる。
 - 3) 叙述反応は、“笑顔”という反応語が筆頭である。次いで“遊び”“笑い”“元気”と続いた。その他“余暇(活動)”、“趣味”“娯楽”“生きがい”などが挙げられた。これらの反応語は、一部の射ている言葉ではある。
 - 4) 共存反応は、“コミュニケーション”を筆頭に“みんな”“仲間”など、レクリエーション活動の効果的側面をイメージした結果と見られる。
 - 5) 役割反応では、“リハビリ”“からだ”“頭”が、ベスト3であった。これらは、言い換えるとレクリエーション活動によって、体力維持、脳活性化などのリハビリテーション効果、またはその密接な関係を認めていることと推察される。
 - 6) 年代別にみると、20歳代、30歳代と比較すると、40歳代ではやや年代差が認められ、50歳・60歳代、とくに50歳代になると顕著に認められた。すなわち50歳代女性は、現場での真摯な取り組みを表すイメージ反応であった。
- (2) 今回の分析結果は、総じて50年前の反応に酷似するところが多かったが、今回は“高齢者”および“コミュニケーション”などの反応語が現れた。これは現代的なニーズと解釈されよう。

5 結び

- 1) 本実践研究報告の限界は、科学的には一般化は出来ない。しかし、介護現場でのレクリエーション支援においては、かつ実用的であることと推察される。
- 2) 介護職員にとって、利用者へのレクリエーション支援が有意義であることは認められるものの、それが負担に感じられ、“面倒くさい”などの反応は、本音を表している。事実、支援の基本的方法を修得せずに、現場の担当になる場合があり、その時の緊張・負担感も大きい。今後、介護職員養成教育において、レクリエーション教育を積極的に取り入れることが、高齢者福祉の向上に資することと、本実践研究報告を通して実感した。